



うぐいす張り

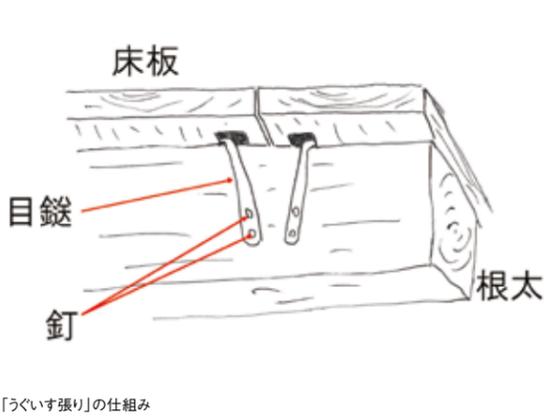


はじめに
床板を踏むと、「ケキョケキョ」とか「キユッキュ」といった、ウグイスが鳴くような音がする「うぐいす張り」。京都の二条城や知恩院が有名で、知恩院のホームページには、その成立の由来について次のように書かれています。

「御影堂から集会堂、大方丈、小方丈に至る廊下は、全長550mもの長さがあります。歩くと鶯の鳴き声に似た音が出て、静かに歩こうとするほど、音が出るので「忍び返し」ともいわれ、曲者の侵入を知るための警報装置の役割を担っているとされています。

また鶯の鳴き声が「法（ホー）開けよ（ケキョ）」とも聞こえることから、不思議な仏様の法を聞く思いがするともいわれています。

一方の二条城についても、観光で訪れたことのある方は、バスガイドや観光ボランティアなどから同様の説明を聞いたことがあるかと思いますが。例えば、嵐山タクシーのホームページ「タクシー会社がこっそり教える京都の魅



「うぐいす張り」の仕組み

いが、それが意図的なものかどうかはわからないと結論づけています。

経年劣化である

「うぐいす張り」とは、音を鳴らすことを意図したものなのか、違うのか。そこが、警報装置説が成立するかどうかの大前提になるのですが、再び『朝日新聞』の記事に戻ってみたいと思います。

まず、前述の記事のタイトルを紹介しましょう。ずばり「うぐいす張り 劣化で鳴くよ」であり、「うぐいす張り」が鳴る要因は、床板を固定する目錠と釘にあるとした上で、「建築当初、金具は釘でしっかり留められていたが、年月がたつて緩み、釘穴が大きくなったが、釘が抜けたります。この状態で床板を踏むと、金具が上下し、擦れ合っ

て音がでる。つまり経年劣化だ」と断定しています。

警報装置？

なるほど、二条城の場合、将軍家や皇族が宿泊する施設ということであれば、念入りに警報装置が用意されたということも考えられますが、こうした説に疑問を唱える声もあります。

他ならぬ二条城の職員からも、「江戸初期に3代将軍家光が入城した際には30万人ともいわれる大軍を率いていた。明治以降は宮内省が管理し、皇室など

力」では、「鶯張りの廊下が京都二条城にはどうしても必要だった意外な理由とは？」と題して、現存の二条城は徳川氏が京都での宿として築いたもので、それゆえに「鶯張りの廊下というものがとても大切になってくるのです。この二条城には、徳川家のほかに皇族の方たちも滞在しております。当時の日本において、とても大切な要人です。そのため、入念なセキュリティが必要だったのです。鶯張りの廊下は当時の最高のセキュリティの一つでした。なので、二条城には、鶯張りの廊下があるのです」と説明しています。

卵が先か、鶏が先か

令和2年（2020）に出版された『日本の建築文化事典』には、「古建築にまつわる都市伝説」と称した章が設けられており、「卵が先か、鶏が先か」偶然に生じた現象を、あたかも最初から計画的につくられたように説明されることもある。その代表例が「うぐいす張り」である。「うぐいす張り」とは、歩くとキユ、キユと音が鳴る廊下のことで、二条城のものがよく知られている。廊下を歩くと音がするのは、室内にいる人に侵入者がいることを知らせるためで、防犯上の目的から設置されたとする説明がよくある。しかし100%信用することはできない」と、かなり辛辣に警報装置説を否定しています。

続けて「この種の廊下は、音が鳴るかどうかという以前に、ほかの目的があった。それは、着物の裾が釘の頭にひっかからないようにすることであり、釘の頭が床面に出ないように設計されている」とあり、床板の上から釘を打ち付けると、やんごとなき人々のお召し物が釘の飛び出し部分に引かかる恐れがあるので、それを防ぐために特殊な工法が採用されたということです。

限られた人しか入れず、一般公開が始まったのは昭和15年（1940）、隙がないほど警備が厳しかった。わざわざ音を鳴らす意味があったのか」という意見が寄せられていました。

知恩院については、たとえ高貴な人々が訪れたであろう大寺院であったとしても、あくまでも宗教施設であり、500m以上もの廊下を、まるごと警報装置に変えなければならぬほど、何を警戒する必要があったのか。ちょっと納得いかない気がします。

音が鳴らなくなった一方で

そうした疑問に答えるかのような記事が、『朝日新聞』の平成29年（2017）12月27日号に掲載されました。それは知恩院の「平成の大修理」の際に、御影堂など建物4つをつなぐ約550mの「うぐいす張り」の廊下のうち、平成23年（2011）に修理を終えた建物の廊下が、それ以降に鳴らなくなっ

意図的にできない？できる？

「日本大百科全書」では、「うぐいす張り」のような工法は、表面から釘打ちすると見苦しいため「高級な手法」で造られたとし、音が鳴り始めたのは経年劣化による偶然で、さらに「当初から意図して鶯張りとするには、穴の大きさを加減するために試行錯誤を要し、むずかしい」と、警報装置説を暗に否定しています。

その一方で、神奈川県に本社を置く菊池建設は施工技術を駆使し、神奈川県大和市の料亭番外新館や静岡市清水区の坐漁荘で、「うぐいす張り」を再現し、意図的に音を鳴らすことは不可能ではないことを証明したといっています。

「血天井」

卵が先か、鶏が先か。技術的に再現は可能だが、知恩院や二条城では当初から警報装置として意図したものだったかどうか。私としても判然としませんが、「うぐいす張り」と似た「血天井」と考え合わせると、おぼろげながら真実が見えてくるような気がします。

かつて、私は社団法人日本土木工業協会（現在の一般社団法人日本建設業連合会）の機関誌「CE」に、「血天井」に関する記事を寄稿したことがあります。

「血天井」とは、戦国武将の血痕がついた床板を、供養のために寺院の天井に使用したという赤黒いシミがついた天井のことで、言われてみれば人が倒れているように見えなくもないものや、あきらかに手形や足形のようなものがあります。しかし、それらは施工時に職人など

らず、近年になって音がでるようになってしまいました。これはどうしたことなのでしょう。

「うぐいす張り」の仕組み

ここで、「うぐいす張り」の仕組みを見てみましょう。普通の床では、上から釘を打ち込んで床板を固定しますが、「うぐいす張り」と呼ばれる床では、図で示したように「根太」という床板を固定するための材に、目錠を釘で取り付け、下から床板を固定しています。

「工学」の1918年2月号には、いちはやく「うぐいす張り」の構造を調べた記事が投稿されており、「床板は羽子板釘（目錠のこと）とも称すべき平鉄と鉄釘とで床板に取付けられてある、而して床板の裏が中高に仕上げられてあるので、歩行に従って床板が動揺すると共に平鉄と鉄釘が摩擦する、其音の響が美妙なる音を発するのである、之が仕口には巧妙なる秘伝があるかも知れない、しかし其理屈は上記の通りに相違あるまい」として、音が鳴る仕組みは目錠と釘との摩擦に違いな



現代版の「血天井」 渡り廊下の天井に靴の跡が赤黒く残る 2007年撮影

が、裸材を手足で触れてしまった際に付いた汗や脂が、経年劣化で赤黒く浮き出たものであることは、比較的新しく修繕された寺社の天井にも同様のシミが付いていることから明白であり、後付けの伝説だと理解しています。

おわりに

「うぐいす張り」の場合、「血天井」のような確信は持っていません。ただ、子どものころに、例えば京都だけではなく、地方の古い寺社を訪れた際にも、「キユッ、キユッ」と鳴る床があり、「ここにも『うぐいす張り』がある。何の説明もないけど、僕の新発見かな、これは」などと、喜んでいたことがあります。

そのような経験も合わせて、経年劣化説が妥当かな、とも思うのですが、皆さんはどうお考えになりますか？

（文：江口知秀）